

てんじくき
天竺記 (三)

勢陽本覺寺

釋 惠 照

(十一) ナグプール (南インド)

日本に於けるインド旅行記の古典に『インドを這う』(「貧困と豊饒・混沌と悠久」永淵閑、というのがある。その古典(日本に於ける「古典」ということであるが)には人を旅に押出す「力」があった。私がおん出た!!『白い薄布で包まれているのが男で、赤い薄布で包まれているのが女の遺体とのことだが、すべて白い布だ。そして、どの遺体もミイラのようにやせ細り、爪先をそろえてピンと天に向けている。』これはこれは……。

『茶毘だびのそばでは、全身がよく焼けるように、棹さおで遺

体を動かし、焼け具合を調節しているひともある。目の前三メートルほどの遺体は、下半身が先に焼けてしまい、上半身が焼けないので、腰から折り畳むようにしている。上半身を棹で立て、前に倒すとき、口から体液だるうか、水をグワツと吐く。骨盤から下はもうなく、頭から燃えさかる炎の中に突っ込んでいく。遺体の顔が私の方に向かって倒れてくる。思わず胃の中のもものが逆流し、口を押さえ、横を向いてしまふ。』ガンジス河沿いでの永淵氏の体験旅行記録ではあるが、その記録に言われた最初の数行の物語りであり、その昔、私を旅に、しかもインドへ押し出したものであった。当時のインド旅行はこのあと南インド先端ではコモリン岬、現在の名はカユヤークマリ、あの有名な「ヤク岬」まで、「トリヴァンドラム市」、「コチン」まで、ヒッピーと言われた若者たちの聖地へとつづいていたのであった。マドラス、バングロール東西線以南は恐怖の、それ故あこがれの、麻薬地帯であったのでした。今は知らぬが、いまの南インド南端やいかん、である。「岬」もだ!!

で、私のこの回はナグプール「竜樹村」とでも申しましようか、『陽も少し弱ってきた四時過ぎ、眠りから目覚め、浜の右手に向かってブラついてみる。』

二〇分も歩いていくと、あたりの人はぐっと少なくなり、そしてトップレスの女性や、ふんどしスタイルの水着の男、また、まったくなにもつけていない白人男女などが、チラホラ泳いだり、肌を焼いていたりする。最初はどつきりしたが、しだいに慣れてしまう。男の裸は、日本の銭湯を想い起こしてしまうが、女性の場合、下半身の淡いかげりも何気なく、劣情（日本ではなぜこういう言葉で表現してしまうのだろうか）を誘うわけでもなく、若く引き締まったその肢体を美しく思う。はるかムカシの物語りになつてしまつたが、このような時代がつつて南インドにあつたし、今も……？。その南インドより北、デカン高原の中心地が今回の旅の目的地「ナグプール」、インドの「へそ」であります。あの有名なシリーズ本、旅行記本、世界旅行本『あるく』シリーズにも、名前すらない、都市名すらない「インドのへそ」ナグプールというインド第二の大都会、そこそここんなであります。

(十二) アラビア海を望んで

空路デカン高原ナグプールに着いた。飛行機はデリー空港から直通であつて、巨大な空港へ着陸した、との感

があつた。こんなところに、こんな空港が、という感じ方があつた。それ故に巨大なということになるわけだろうか。ナグプール巨大空港。これで五回目か、インドは『天竺旅行』はじめての地、インド「新仏教徒の地」、いや世界の新仏教徒の地、といった方が適當しているか、あこがれの地ではあつた。かの、B・R・アンベードガル博士、インド憲法起草者、インド仏教徒の希望の星、ビーム、アンベードガル、その大地。ヒンズーより、キリスト教より、の改宗。宗教を変えて、新しい宗教の信者となる改宗運動、その頭目。アンベードガル博士は、いまここに生きつづけている。肉体はすでに亡びて幾年月、しかしその精神が、その信仰が、いま、ここに生きている!! そんな大地、デカン高原、そこへ来た。空港の名前がまず「アンベードガル国際空港」であつた。ここ十年のインドの大変動を象徴するような空港の名前であつた。今も地図に無い!!

その博士の改宗運動の発祥地、その改宗広場（ディクシャブーミ）及び記念の大会堂の訪問でまずこの旅は始まつたのであります。そしてアンベードガル博士が改宗後に第一番に建立した「インドラ・ブッダ・ヴィハラへ。」(Indora Buddha Vihar) ビハラー。(ビハラーは

「寺」のこと。)日本ではビハラが病院とか、診療所施設のように使われているが実は「寺」なのである。そこにナント、ナント、日本人で「あつた」佐々井秀嶺氏が住んでいるとのことであり、我々ツアーの連中は、いさみ立った。ことわっておくが今回の旅は「ツアー」であります。研究旅行の、天竺記(三)であります。そこで仕入れた情報に驚いたわけである。その数値にである。ナント、インド仏教徒、二〇一五年一月の只今、一億三千万人ということなのである!!アラビア海へとつづくデカン高原の西半分はそこに住むなんと一億のインド人が改宗した「新仏教徒」、ニューブデイストとして生きつづけていたのであります。インド国全人口は只今十三億人!!

(十三) ベンガル湾からアラビア海まで。

このインド亜大陸に起きている宗教大変動の事実は殆んど情報としては「世界」に発せられていない。なぜなのか、なぜなのか——その問いは十数年前から私の中にはあった。ナゼ「新仏教徒の運動が世界に発信されるのか——ヒンズーとカースト、この二つがその答でありました。その解答がこのたびの旅で小生にはつきり

と自己証明された「事実」がある。何をかくそう、この本、『ブダとそのダンマ』一冊であります。作者B・R・アンベードガル。現地で入手した、垂涎もの『THE BUDDHA AND HIS DHARMA』英書本!!ただの一冊。この本、日本は渡来して、伊勢市出身故山際素男訳書が三一書房からはすでに一九八七年に単行本として出されている。この一冊であるが、後日アンベードガル博士のムンバイ(ボンベイ)納骨堂の在る寺町、門前町で入手してここに所持している。

ヒンディ81%、イスラム13%、キリスト教2%、シーク2%、仏教徒0.8%、ジャイナ教0.4%、その他0.2%、これ全くのガセネタである。冗談である。ものの本や「あるく」本、にそう書いてあるから、それを信じてきた私がバカだった。今回たくさんの仏教徒、新仏教徒の家を一戸一戸たずね、言葉を交わし、村々を見て、住まう人々と語り合う中で、本当にすまない気持をもったことになりました。

(十四) 竜樹リオンジュの村々を訪ねて。

一九五六年十月十四日、三〇万人の不可触民(アンタツチャブル)を前にビーム、アンベードガルは立上った。

そして呼びかけた。

〃迷信を信ずることは「ダンマ」ではない。ヒンズー信仰は「ダンマ」ではない。〃

〃靈魂を信ずるのは「ダンマ」ではない。〃

〃供養信仰は「ダンマ」ではない。〃

〃「他界」など勝手な「推量」は「ダンマ」ではない。〃

〃知識を蓄えるだけが「ダンマ」ではない。〃

〃教典（ダンマ）の不可謬性を信じるのは「ダンマ」ではない。〃

そう宣言した時三〇万人の聴衆はすべてがすべて一せいに立上り、入信を、「改宗」を宣誓したのでした。以後年間四万人の改宗者（ヒンズー教からキリスト教からの改宗が多い）、そして指導者たるべき役割を荷負う「寺」が今、インドに、特別ナグプールに六三三軒という数字を生み出しているのである。

その寺々を私は見た。ど田舎の村々にアンベードガルの金像アリ。

(十五) カヒール博士(アンベードガルの夫人)

不可触民と、その男性とバラモンの女性との結婚は「逆毛婚」として、カースト制度の中では最も忌避されてい

て、アンベードガルのその夫人の写真が、ディクシャミーの中のドームの中、周囲にかざられていたのを見る。自らカースト制度打破の実践としてアンベードガルはあえてこの婚姻を為したのである。

一人一人のインド民衆にとつては、改宗申請書代金が二五〇〇ルピー（日本円で千二百円）、その金の捻出がまず大変であり、文書申請して、新仏教徒として「改宗許可書」をもらうのである。逆に仏教徒に改宗したとたん、今までの政府からの「諸補助」が途切れることも十二分に考えられるので、かくし仏教徒、かくれ新仏教徒も続出しているのも事実である。

『ブツダがダンマと呼ぶものは宗教とは根本的に異なっている。彼のダンマはヨーロッパの神学者が宗教と呼ぶものと似てはいるが、類似性よりむしろ相違性の方が遙かに大きい。このためブツダのダンマを宗教と認めないヨーロッパの神学者もかなりいる』（アンベードガル『ブツダとそのダンマ』より）大変なことをここでアンベードガルは言うているのである。「宗教」とは一体何なのか。

(十六) マンセル遺跡へ

南天竺に比丘あらん

竜樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべしと

世尊はかねてときたまふ

(親鸞『高僧和讃』より)

親鸞はこのように言われている。竜樹菩薩はナグプー
ルに生まれ、その生活のあとが「マンセル遺跡」である。
巨大な赤レンガつくりの建物が山の頂上まで造りあげら
れ、最近になってやっとインド国の遺跡発掘事業が開始
されたが、壮大な遺跡であり、どこまで拡大されてゆく
のか、誰れにも分らないといわれている。

そこに寺があり、元日本人僧、佐々井秀嶺氏が住んで
おられ、この地方一帯の仏教徒の最高指導者として尊崇
の的となっている。その寺の前には同じく巨大な山際素
男氏の像が(半身大)、立てられていたのである。おど
ろくべし。いま、世界中で「宗教戦争」といわれている
ものが陸続している。日本人がまきこまれ大惨事になる。
おこるべくしておこった惨事であるが、死亡者の数字に
おどろく我々の心根は一体「宗教」とは何なのか、とい
うことであるべきなのに、一人としてそのことへの疑い
がない。これはどうということなのか。不思議である。仏

教徒としては世界宗教の三つ、仏教、イスラム教、キリ
スト教というとき、仏教だけは「神をたてない」「靈魂
を認めない」というところで「宗教戦争」から無縁であつ
たし、これからもそれは——ない。なぜなら一般に言わ
れている「宗教」の概念からは自由なのであるから。「宗
教」は明治日本の密輸入の英訳定義で成り立っているだ
けであり、古代の日本人の勝手な宗教観なのである。

明治期我が国へ入り込んだ Religion は「神」
を立て、「宗教」とほん訳して一人歩きさせてしまった
我々仏教徒の責任ではある。仏教を「宗教」というなら
イスラム、キリスト教は「宗教」ではないし、イスラム、
キリスト教を「宗教」というなら「仏教は宗教ではない」
と小生この三十年来の主張が認められねばならぬのが、
アンベードガルの「ダンマ」の主張であろうと思う。マ
ンセル遺跡の頂上で私は改めて「宗教」の再定義の必要
性を感じたのであります。

(十七) デカン高原——そこに「原発」秘密基地(?)

『宗教は個人的なものであり、自分一人のものとして
秘めておくもので、公に開陳するものではないといわれ
る。それに反しダンマは社会的である。根本的、本質的

にそうなのだ。ダンマは義であり、あらゆる生活分野における正しい人間関係を意味する。』(前出書)人は社会的動物なのである。ダンマなくして社会は成立しない。そこるところにおいてデカン高原の高みから佐々井秀嶺氏は活動を始めたと思われる。ダリットとも言われるヒンズー社会の最下層といわれる人々を改宗し、その生活を建て直しもし、そこから東に向かい、今やヒンズーのビハール占領を解放し、その中心ブツダガヤ佛跡も取りもどす作戦に入っているのが今日の佐々井氏の歩みである。何万人もの民衆がその長い旅につきそって行き来している日常がある。デカンとガヤ。

ナグプールの町は、その大道は八車線の広いアスファルト通りであるが、車とオートバイが半々である。そしてオートバイには男女の二人乗りが多い。女はこの暑さしのぎに頭布をかけ、口はマスクでぶっとばしてゆく。とにかく広大な大平原なのである。ところどころ「ねむ」の木や黄色、赤色の花が年中盛りの街路である。二〇〇年、三〇〇年のそれこそ巨木ばかりが歩道を占めて立上っている。

この町にもはや乞食はいないのか、と昼の真中、人ごみを歩いて見かけない。ここ二十年來の都市の變化

は大々的である。ムンバイ(ボンベイ)の町をバスが走る。そこにもいない、いない、「乞食」はいないのだ!! 變化だ、大變化だ、ここ二十年來の傾向は都市部においては「變化」という一語に尽きる。昼なのか?

但し、帰りの空港(デリー)近辺の巨大ビルのアパート群の「空家」にはシヨック!!

空(から)アパート群が林立して建っているのは、丁度インドの經濟生活の變化一九九一年經濟開放、その經濟政策のハタン、日本的に言えば「バブルの崩壊」時期に当たっているのがこのデリー周辺の空(から)ビルの林立の姿で、バスからそれはそれはすごい風景ではありました。

(十八) ムンバイ海の半月

ナグプールから再びデリーへの帰り道はバスの旅であった。その前に飛行便で先ずムンバイへ。

バスの中からは、突如巨大なドーム三ツ。「原発」である。まがいもなくそれはデカン高原に巨像のように立っていた。遠望しただけで通過したが、話には聞いていた。この目でしかと見たインドの「原発」ではあった。

原発の電気が貧しい生活を立直すか?
たてなお

アラビア海に出た。海のむこうはアラブ、アフリカである。くもり空の海は灰色であったが、半島らしく弓状の浜には人は居らず、長い堤防の上を人々が散歩しているのか、堤防上にはたくさんの人・人・人。

夜、アラビア海に出た半月が恋人どうしだろうか、三々五々海辺にすわり込んで、チャイ（お茶―甘い）を飲んでいる。遠くの半島の先端にもビルが光を灯して林立しているのが見える。

ナグプールからムンバイへ空路にて到着。市内にアンベードガルの荼毘所（チャイティアブーミ）へ。不可触民出身のアンベードガル氏であるが、火葬は差別された火葬場で行われたということであった。死してなお差別あり。

その荼毘所から近くの村へ。アンクルブツダビハラという村で我々は案内人の世話で、歓迎会を開いてもらったことである。

このビハラで開かれた仏教としてのアンベードガルの崇敬の様子が、本堂の中心に仏陀とアンベードガルの写真という形で、表現されていた。どの村々でも必ず入口にアンベードガルの金色の胸像が立てられていることは以前に小生も書き残したことで、この回も金色像とし

てそれは証明されていた。

つづいて、アンベードガル・ナガル（アンベードガル町）へ。この町は仏教徒でなくヒन्दoo教の集落であったが、宗派をこえてアンベードガルは今やインドの町々に不可触民の象徴的人物としての位置を占めていることの証しではあろう。名前を知ってるよ、憲法の作者だよ、但し仏教徒であることは「知らないよ」ということであった。そんな村々もたくさんある。だが実は五〜六年前から急に町並みや、住居、建物が大きく、きれいになった、というのである。自分達自身がおどろいていることである。

そんな村中で若者たちはクリケット遊びに夢中であって、羽子板の大きい形の板を振り回してボールを打つのである。小生も一発、久しぶりの快感、大へん遠くまでボールが飛んでいって、青年達みんなから大拍手をもらった。

近代の、いや全く近い今日、どこの差別部落も急激な「美化」がすすんでいるのである。これは驚くべきことなのである。アメリカへの出稼ぎや国の経済政策の変化や、バブルもありながら一九九一年以後の開放経済政策が大きく民衆の生活を下からおし上げている実感が今回

の旅で至るところに見出された。その他生活の中味として各部落、各町々で人々に聞かれたんびに、その就学率の高さにも驚かされたこともあった。そして「差別されていることを知っているか」との問いに対しては「差別はない」との返答が多大部分を占めて帰ってきたのでありました!!これはどういふことなのか、仏教徒、ヒンズー教徒の別なく、そのような返答をいただいたのである。

(十九) 旅の終りはデリー三角地帯。

親が決める結婚、それは現在只今のインドの大半の常識のようである。しかし都市部において、恋愛結婚が増加しつつあること、それも又一半の事実である。異カーストの「井戸水を飲む」という、根本的なタブーがいま、インドで破られつつあるのも又事実である。

そう、たしかに、私は聞いた。デリー、ムンバイetc.この回の旅の最大の収穫かも知れない。ヒンズーの村々へも立寄ったが、相も変わらずの乱雑の村々の風景の中にも地下から、はるか遠くから「近代」が、麦の刈入れの進む村々の隅々に「近代」が、それこそ目には見えないが、激しい変化が、私達を見た、聞いた何十倍の大きさで近づいているのかも知れないのだ。いいことか?遠い

太鼓のように……。

この冬(二〇一五―六年)もまたインド旅行を計画している。今回は僧侶仲間での旅である。僧侶コースとして現在まで五泊六日間の巡礼の旅であるが、デリーに空路香港やシンガポールまで翔んで、ガヤ、ブッダガヤ、ラージアクリハ(ラジキール)、ナランダ、そして靈鷲山りょうじよと定番コースである。ことさら日本人をとつても一般旅行者との接しよくはほとんどない。インドは東北部であり、インド旅行の定番ルートであろうが、今回のようにデカン高原、ナグプール、となると『あるく』旅行本にも全く都市の名前すらない。仏教が大乗的展開をみる・原・点・が・外・なら・ぬ「竜樹大土」なのである。日本人にこだわるわけでもないがそこに日本の旅行の会社にしても殆んど目が行き届いていないのはどういふことかナ、と今回のデリー離陸の時にフツと思いついた事実でありました。真宗の七高僧として。

竜樹リョウジュ、天親テンシン、道綽ドウダク、善導ゼンダウ、源信ゲンシン、源空ゲンクウと、リュウウテン、ドンシヤク、ゼン、シン、クウと呪文を唱えて三国七高僧の「浄土真宗の流れ」をたしかめてみた次第である。こんな「旅行記」もあつていい!!。

(完)

《参考文献》

『THE BUDDHA AND HIS DHARMA』
A (By Dr. B. R. Ambekar / Buddha Bhoomi Publication / Nagpur)

『ブッダとそのダンマ』(B. R. アンベードガル / 山際

素男訳 三一書房)

『インド・カーストの旅』(国井哲義 創言社)

『インド』(地球の歩き方 / 2014 ~ 2015 ダイア
モンド社)

『インドを這う』(永淵閑 立風書房)

